



藤織作家



ジビエ処理施設



上世屋地区の風土と暮らしの図



和紙作家



水稻農家

風土を活かし表現する

～自然農法的な山村集落の試み～

チャントセヤファーム

代表 小山 ^{ひで}愛生さん

はじめに

元伊勢、天橋立で有名な京都府宮津市。市内から元伊勢籠神社を過ぎ、世屋高原への案内に導かれてひたすら道を上がっていくと、昔ながらのブナ林に囲まれた棚田と上世屋地区の山村が目の前に広がります。しかし、この美しい山村風景のコミュニティや豊かな暮らしを守るためには、若手就農者の確保が地域の課題となっています。そこで、若手を中心に「土着しよう、してもらおう」をテーマに、移住者確保のための「ドチャック会議」という任意団体を2016年に立ち上げ、農水省から5か年の農山漁村振興交付金を受けて取り組んでいます。

自然と共に生きる上世屋地区の人たち一人一人が大変興味深い人生を謳歌していますが、その中で夏は自然農法水稻農家、冬は猟師とジビエ処理施設を経営する「半農半X」を営むチャントセヤファームの小山さんとともに、昔ながらの農村の暮らしの原点を守りながらも、風土を活かして新しいことにもチャレンジする自然農法的地域社会づくりを考えます。

上世屋地区の

「コミュニティ」の特徴

京都府宮津市上世屋は、府北端の丹後半島中央部に位置する山村集落です。標



上世屋地区の皆さんと（左上が小山さん）

高は350〜500mで、丹後天橋立
大江山国定公園内にあり、周辺には近
畿でも有数の高山ブナ林が広がってい
ます。冬季の積雪は2mに及ぶ豪雪地
でもあります。

集落には昔ながらの習慣が淡々と受
け継がれています。例えば、万葉集に
も記述が見られ、国内で広く普及し
ていた藤から繊維をとって織り上げ
る「藤布」は、日本で唯一、この地域
で伝承され続けている古代布の一種で
す。この「藤布」を織る藤織りを代表
に、生活や労働の中に伝統を色濃く残
しており、それらが評価され「にほん
の里100」に選定されています。

この地域の夏は、棚田の稲作が主た
る産業です。6軒が稲作をしています
が、内5軒は現在も「稲木干し」を続
け、3軒が有機農家です。慣行農家で
も、例えば秋に刈った畦草を集め、稲
刈り後の田んぼに返すなど、受け継が
れてきた農業技術を淡々と続ける人も
います。風土を知り、活かす旧農民の
技術は、自然農法という観点からも学
びやヒントがあるように思います。

人口は22人（12世帯）ですが、移住
者が7割を占め5世帯が30代と若返り
つつあり、移住者も増えている傾向に
あります。和紙作家や藤織り作家、猟
師、観光など多様な生業の人々が、上
世屋の風土の表現者としてアートの活

動をしています。彼らは、自分の仕事を
中心にしながらも、水稻農家と協働して
豊かな棚田風景を持つ上世屋の景観・地
域を守ってくれています。水稻農家が
いなければ棚田でお米は作れませんが、地
域の理解とサポーターがいなければ棚田
そのものを守ることができません。これ
は日本型農業・農村の重要課題の一つで
す。

効率主義に流されているように見える
現代社会の中で、昔ながらの良さを守り
続けた「よそはよそ、うちはおうち」の精
神と、「お互いさま」で村人同士協力し
あう精神が息づいた集落です。

自然農法水稻栽培と 狩猟・ジビエ施設運営の 経営両立のきっかけ

1. 自然農法水稻栽培

元々は新聞記者をしていた、取材先の
上世屋集落に興味を抱き、2009年か
ら棚田オーナー制度を利用して米づくりに
触れたことが農業に携わるきっかけで
した。当時は紙マルチを使用した有機栽
培に取り組んでいました。2014年に
新聞社を退職し上世屋集落へ移住。集落
でより良く暮らすことを重視した結果、
稲作をナリワイに選び、有機栽培しか知
らなかつたためそのまま現在に至ってい
ます。上世屋での有機栽培であれば、比



山間に広がる棚田の風景

較的有利な販路が約束されていたことも一つの要因でした。ただ、稲作のマニュアルがあるものだと思います、全くの異業種から就農しましたが、様々な本や研究資料を読むと全く反対のことをいう本や、根拠の分からない主張も多いように感じられ、予想外に五里霧中のスタートでした。

実際の田んぼ仕事は一から集落農家に習うとともに、観察力とあるものをうまく活用する精神を学び、松下明弘氏の「ロジカルな田んぼ」と自然農法センターも関わった日本土壌協会の「水稻の有機栽培技術」を教科書に経験を重ねています。同センターの「自然農法技術交流会」に参加すると、主義ではなく観察を主に据えた自然を活かせる農業というスタンスが心地よく、様々な生物や現象が複雑に関連しあう自然現象を、そのまま理解しにくいものとして提示している資料もかえって分かりやすく、圃場ごとに農業者が手探りで正解らしきものを見出すしかないことが理解でき、揺るがない自然の摂理のようなものがあることも感じながら実践しています。

2. 狩猟・ジビエ施設運営

たまたま、移住前の2012年から、京都の北山を猟場にする下鴨

友会に入れてもらい狩猟をしていました。自力で山の肉を捕ってくるというシンプルさ、山を知り獲物と駆け引きする猟師たちのかつこよさが魅力でした。「こんな雪あったら、あいづら（獣）もしんどいんや。上には逃げへん」「冷え込んで寒いやろう。あいづら日当たりのええところで寝とるわ」。水稻や雑草を理解しようとする自然農法にも通じることですが、猟師は獣の気持ちになつて猟をします。足跡や食痕を見つけ、獣の動きを予測することなど、狩猟でも観察力に基づき想像力を働かせることがとても大切です。

世屋は獣害が深刻ですが、一方で猟師という立場に身を置くと非常に恵まれた場所でもあります。ジビエ処理施設が、これからの新規就農者にとっても、冬場のナリワイの一つになるのではないかと考え、地域の協力も得て運営することになりました。

詳しくは「ホームページ『小さく生きた』狩猟をナリワウプロジェクト」をご覧ください。



<https://kamiseya.com/projects/pro1-3>



経営の概要

1. 水稲栽培経営の概要

自然農法で就農して7年になります。現在の耕作面積は2ha、棚田です。ので圃場枚数は50枚(平均で4a)あり、全ての圃場で自然農法を実施し、平均収量は4〜5俵/10aです。稲作の基本的な作業は夫婦2名で行いますが、水路確保や獣よけの柵の設置や撤去は地域の人たちとの協働です。田植え・収穫時期の草刈りな



一面の雪景色

どに5人・日/年程度で臨時雇用します。畑作は行っておらず、農機類はトラクター、耕耘機、管理機、播種機、田植機のほか、棚田の小さな田んぼはバインダー収穫で稲木干しですが、棚田以外の大きな田んぼ(最大で25aくらい)もあるのでコンバインも持っています。

2. 上世屋獣肉店の経営の概要

狩猟期間(11月15日〜3月15日)は狩猟を行い、ジビエ処理施設「上世屋獣肉店」を運営しています。2018年2月に開業(食肉処理業(食肉販売業)し、1シーズンにイノシシやシカ50頭ほどを1人で処理しています。少ない処理頭数でも運営維持できるように処理施設としてはコンパクトですが、0次室(平屋外洗浄)、1次室(内臓摘出、剥皮)、2次室(脱骨、精肉)の3室構造となっています。京阪神の都市部飲食店をメインに販売し、現在は狩猟期間のみ稼働していますが、2020年度からは年間稼働を予定しています。

自然農法栽培と狩猟の考え方、基本とする技術

狩猟ではエサなどをコントロールできないなど、人間が関与できる度

合いに差はありますが、自然農法による水稲栽培も狩猟(ジビエ)も風土を活用し表現するものという点では、全く同じスタンスで取り組んでいます。

1. 自然農法水稲栽培の

考え方と基本技術

(1) 育土(土づくり)について

上世屋地区は典型的な日本海側気候であり、稲刈り時期以降は特に多雨多雪になります。自然農法を実践する農家に限らず、多くの農家が秋起こしを行い、うね立て耕も普通に見られる技術で、ワラをいかに腐熟させるかが稲作のカギでありながら、冷涼湿潤な気候からそれが困難な地域です。そのため、排水性をよ

くするための中干し時期の溝切りも広く行われています。チャントセヤファームでも秋起こしが最重要課題の一つですが、稲木干し作業の終了が11月初旬と遅く、秋起こしが11月中旬までかかるため、積算温度不足からワラの腐熟が不十分なまま翌年の田植えを迎えていることが大きな課題であると考えています。

耕作面積の約半分にあたる1ha(計35枚)が稲木干しであり、その圃場のワラは稲株を残し全量持ち出すこととなります。集落の農家は「昔は持ち出したワラの一部は刻んで田んぼに返していた。返さない農家の米は良くなかった」と言います。全量持ち出した場合、上世屋では土が痩せることが予想されるため、現



壁のようにそびえ立つ稲木干し

在は、牛糞堆肥500～1000kg／10aを春もしくは秋にすき込んでいます。ワラを全量返している田んぼにも堆肥を投入していますが、いずれかの時期に堆肥投入が不要になると想像し、今後見極めていきたいと思っています。

(2) 育苗と田植えについて

就農6年目である2019年にポット育苗に切り替えました。集落で一般的なトンネル式の折衷苗代で、プール育苗に比べて根が土の中にゆったりと伸長できることがメリットですが、苗代づくりや水管理の手間は繁忙期の負担増になっている面もあります。種は自家採種を基本とし、数年に一度は採

種用の種もみを更新しています。

毎年5月20日から6月10日ごろに田植えを実施しています。苗は3回に分けて播種・育苗し、苗が硬化や老化しないよう追肥などにも努めています。出穂期の平均気温を重視して、そこからの逆算で播種や田植えの時期を決めています。栽植密度は圃場により坪50～56株で、田植え時期によっても調整していきたいと思っています。

(3) 病害虫・雑草の抑制について

抑草に関しては秋起こしによる稲ワラ分解をはじめとした土づくりを中心に据え、オタマジャクシによる土壌表層の攪拌に歩行型の除草機を合わせて実施しています。オタマジャクシが非

常に多く出る田んぼでは、代かきを1回にすると数が増えることが分かり、無除草にむけて今後重視していきたいところです。

就農当初は、肥料による根の障害を防ぐため全量表層施肥にし、抑草効果と初期生育向上を期待していました。が、田植え時期は平地に比べ水温が低く、初期生育を促進するために、米ぬかを発酵させたボカシ肥料（窒素量で2～4kg／10a）を春先に浅くすき込んだ方が初期生育はよく、草も生えにくくなっていると思います。

カメムシ害はほぼ問題になっていませんが、ここ数年、やや増えてきていると感じています。田植え時期にはイ

ネミズゾウムシとドロオイムシが多いですが、イネミズゾウムシの産卵盛期後に田植えができれば、大きな被害にはなっていないせん。ただ、産卵期の見極めは勘に頼っていて、被害を受けることもあります。また、イナゴが非常に多く、生育が悪い稲に集中するように感じています。

2. 狩猟の考え方と基本技術

(1) 捕獲方法

ジビエの味わいに最も重要なことは、どんな山で捕獲されたか、どんなエサを食べていた個体なのかです。国定公園にも指定される豊かな自然環境とブナ林をはじめとした落葉広葉樹林は、獣たちの良好な餌場でもあります。エサが豊富な山域での捕獲に有利な、くくり罠などでの捕獲を積極的に行っています。

(2) 処理方法

処理の中では放血作業の良し悪しが肉の臭みなどを決定づけるために最も重要です。心臓のポンプ作用で筋肉内部から血を抜くため、捕獲個体が生きている間にしか行えません。一定の技術と品質向上への意欲が必要で、他の猟師さんに任せず、現在は私がすべて捕獲現場に向き行っています。

(3) 個体差の考え方

そもそも、ブナ林をはじめとした豊



仲睦まじい小山さん一家



かな山々に囲まれた上世屋周辺域は良質個体が育まれやすい環境であり、猟師（ジビエ処理施設）にとって恵まれた環境です。家畜肉と比較したジビエの最大の特徴は個体差があることです。雌雄の違い（家畜は去勢されるので基本的にメス）、年齢の違い、食べているものの違い、捕獲時期、その年の山の状況などにより、肉質や脂のりも千差万別です。また、一般的な家畜よりも自由に運動しており、筋繊維が発達するため、より筋肉の部位差も出やすいとされています。「これが良い」「あれはダメ」ではなく、個体や部位ごとに、それぞれ適した調理法があり、それをミスマッチのないように料理人に届けることが重要です。



イノシシと格闘する小山さん



コンパクトサイズのジビエ処理施設

出荷、流通、消費者に 対する考え方

現在はお米の収穫量が少なく大口の出荷先2軒への出荷分ではほぼ完売してしまいます。出荷先は地元の酒蔵と稲木干しや有機の商品にこだわる業者で、上世屋という地域で行う農業への評価をしてきていると思います。

ジビエについては、美味しく食べてもらうために個体の把握や出荷先の料理人との丁寧なコミュニケーションが欠かせないことから、処理頭数を増やさず、少数処理でも運営が継続できる小規模施設の強みを最大限に活かしたいと考えています。お米もそうですが、ジビエも食べて味わっていただくこと



イノシシ肉とシカ肉

3月発売の
「ひとやすみ」

若手アーティストが制作した和紙糸を使ったモビール



若手アーティストたち

上世屋の和紙や藤織作家たちも、例えば和紙の原料となる「こうぞ」を上世屋で栽培したり、近くの山から採った藤の蔓から繊維をとるなど、上世屋で受け継がれてきた技術や自然環境に依存したもの作りを行い、それぞれの作品で風土を表現しています。ゲストハウス開業を目指す新たな移住者（日本人とベルギー人夫妻）も昨年加わりました。集落の多様な作り手を繋げ、来訪者に上世屋の暮らしの魅力を体感してもらえる場ができるかもしれません。

協生世屋
ホームページ
はこちら

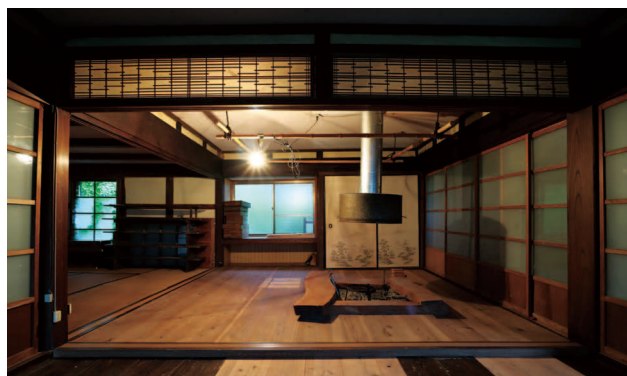


<https://shop.kamiseya.com/>

ん。それは地域の新たなコミュニティ維持の仕組みとなるのではと、期待しています。

将来の目標・抱負

稲作では「土着するお米」をコンセプトにしています。風土を活かし、村人の流儀を学ぶことで、「ちゃんと上世屋らしい」お米を育てたい。その願いを屋号「チャントセヤファーム」に込めました。それが、結果的に美味しくて安全なお米に繋がると考えています。この集落での田んぼ仕事は農道や水路の大半が昔ながらの土道・素掘りのため、維持には人手が必要であり、



移住体験施設「セヤハウス」

大型機械が使えない小さな棚田での作業など何かにつけて助け合いが必要です。少ない水を譲り合う気配りも含め、集落で暮らすうちに、この田んぼ作業こそがコミュニティの維持や豊かな農地生態系の形成に欠かせないのではないかと実感するようになりました。これが何よりの財産であると考えています。

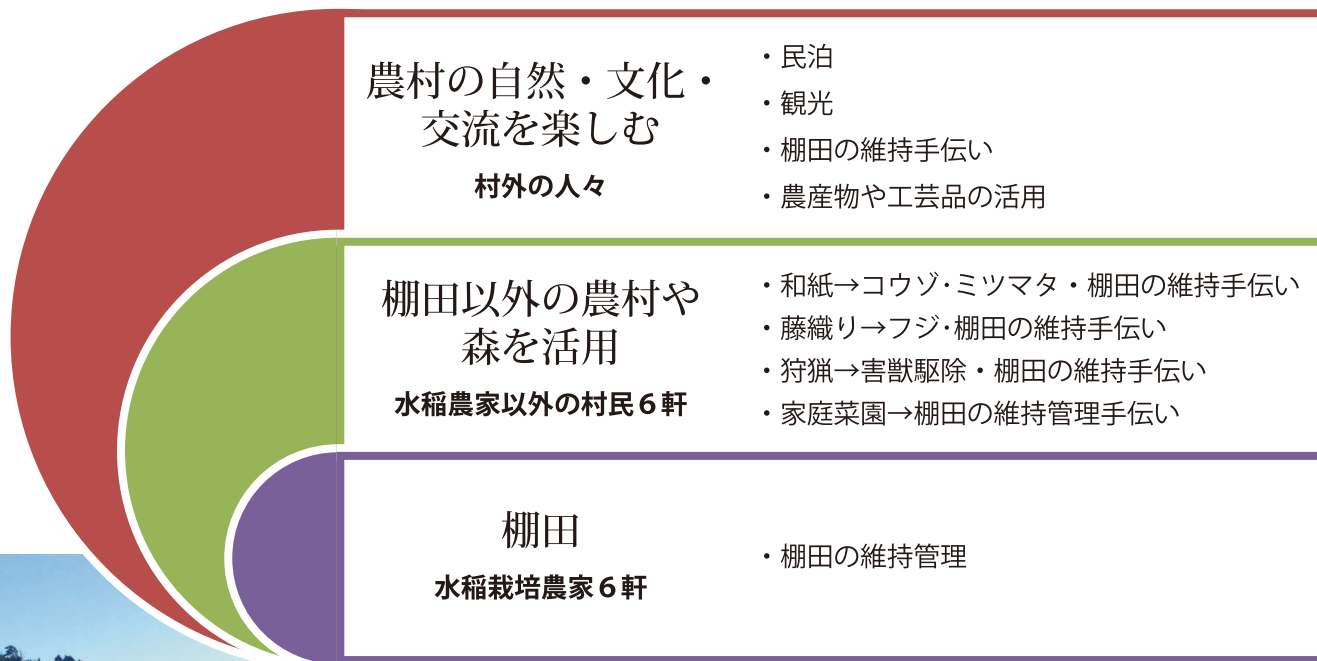
集落の農業者には若手がチャントセヤファームの1世帯しかおらず、今後の農地維持や農業技術だけでなく豊かなコミュニティの継承のハードルとなっています。チャントセヤファームが、ジビエ処理施設と合わせて就農や猟師志望者の受け皿となれる体制を作りたい、そして、集落での豊かな暮らしを続けていきたいと思っています。

(榎原 健太朗)



ゲストハウス開業を目指して移住してきた夫妻

上世屋の棚田を中心とした人のつながりと地域づくりのイメージ図





「夏は稲作・冬は猟師」の1年

時期・摘要	作業	実施方法・その他
4月～	春起こし	堆肥・ボカシ散布、荒起こし
	選種	塩水選（品種：コシヒカリ、亀の尾、新羽二重糯、赤米、黒米）
	浸種・催芽	催芽機使用
	播種	1ポットに3～4粒（ミノルポット）
	育苗	折衷苗代、窒素で3～4g / 箱程度追肥
	入水	4月20日～（入水可能期間：4月～9月）
5月上～中旬	代かき	水はけの悪い田んぼは1回代かき。よい田んぼは2回代かき
5月中旬～	田植え	イネミズゾウムシ・ドロオイムシの産卵盛期を避けて田植え、坪50～56株、田面施用なし
6月中旬	水管理①	ヒエが生える田んぼは少ないため、浅水管理で分けつ促進重視
6月中旬～	雑草対策	除草（植代かきから約10日後に1～3回、歩行型機械除草）
7月上～中旬	中干し	水はけの悪い田んぼは14日程度、土を見つつやや強めに行う
	水管理②	かけ流しができれば行う、一部水不足になる田んぼもある
8月	出穂	8月1週目ぐらいから
	追肥	なし
	落水	水はけが悪い田は田植え20日前ぐらいから
9月中旬～	稲刈り	コシヒカリ稲刈り開始
10月上旬		コシヒカリ稲刈り完了、秋起こし順次開始
10月中旬		天日干し米脱穀、新羽二重、黒米稲刈り
11月上～中旬	秋起こし	完了
11月15日～ 3月15日	狩猟期間	ワナ設置・捕獲・解体・販売～ ※稲作関係ではボカシ肥料づくりなどを行う



棚田をナリワウ学校 2020

自然に囲まれた棚田の米作りでどんな作業をしているのか、一年を通して実際に体験してみませんか？

チャントセヤファームの上世屋の棚田で実際に米づくりをしながら学んでいただきます。知識や方法を知るだけでなく、積極的な参加意欲のある方を求めています。参加者皆さんも互いに学び合う場です。

4月～11月に1泊2日×8回のプログラムです。平日と週末の月2回開催しますので、ご都合に合わせて参加していただけます。

7月と10月には自然農法センターより「秋～春の育土と抑草効果の関係」、「風土に適した秋処理」をテーマに情報提供します。

詳しくはホームページ <https://kamiseya.com/events/tanadaschool2020> をご覧ください。

お問い合わせ先：ドチャック会議 TEL：090-5978-8315（小山有美恵）メール：kamiseya.sumu@gmail.com

※新型コロナウイルス感染症拡大防止対策により、中止や縮小の可能性があります。

